

公立大学法人 国際教養大学 中嶋嶺雄学長 特別インタビュー

“英語で学ぶ” 時代が到来！ 今最も注目されている国際教養大学 中嶋嶺雄学長に聞く、 日本の英語教育の未来



中嶋 嶺雄

公立大学法人国際教養大学理事長・学長、国際社会学者。
1936年長野県松本市生まれ。
国際学修士、社会学博士（東京大学）
文部科学省中央教育審議会委員、東京外国語大学学長、オーストラリア国立大学やカリフォルニア大学サンディエゴ校大学院の客員教授などを歴任。

2004年4月、秋田県に公立大学法人 国際教養大学が設立され、開学してから9年目。

授業は全て英語、1年間の海外留学、外国人留学生との寮生活など、これまでに日本に無かった画期的な取組で有名となり、そして、今や就職率はほぼ100%、日本でトップクラスの大学とまで言われるようになった。

この革新的な国際教養大学を創ったのは、中嶋嶺雄学長。中嶋学長は過去に中教審教育課程部会外国語専門部会の主査を務められ、まさに小学校英語活動を推進されてきた立場でもある。

現在の小学校英語活動の現状と問題点、そしてこれからの日本の英語教育の未来についてお話を伺った。



小学校英語の現状について

—中嶋学長は中教審外国語専門部会の主査を務めておられたこともあり、小学校英語についてご存知だと思いますが、今の小学校英語の現状をどのように見ておられますか？

非常に不満足です。こんな中途半端なことをいつまでもやっていると、日本はまた英語ができない子ども達を作り、英語コンプレックスの環境に置き去りにしてしまう気がします。もっと本格的に実施することが大事だと思います。

英語がこれほど国際語として、そして、コミュニケーションのツールとして重要になってきており、ましてや、今のグローバル化という時代に直面しているわけですから、国語や算数と同じようにきちんと教育することが必要です。

現状において、文部科学省にかなり責任はありますが、私にも責任があると思っています。中教審外国語専門部会の主査を務めていたこともありますから。中途半端な形で小学校に英語を入れてしまったわけです。

—今は担任の先生が主となり、ALTとチームティーチングで教えているところが多いようですが、指導者についてはどのようにお考えですか？

今のような5、6年生に特別活動として年間35時間前後というものでは、ただの遊びになってしまいます。それだけの時間では教える側も大変です。ALTの数も少ないのでもっと増やす必要があります。

各小学校に一人ぐらいのALTがいるような体制を作らなければいけないと思います。

要するに、英語教育の根本が無理解なまま、小学校英語がスタートしてしまったのです。

そのひとつの理由として、当時自民党の伊吹文明氏が文部科学省大臣となりましたが、それが事前に予定が無く、急に決ってしまったものだから、伊吹さんは何の用意も無く記者会見に臨んでしまった。そして、記者団から英語と国語どっちが大事かという問いに、それは国語だと答えてしまったのです。

そのことが影響して、それから半年ほど小学校英語に関する外国語専門部会は開けずにいましたから、何も決められずに遅れてしまい、年度末に結論を出さないといけない時、最後に妥協的な結論を出さざるを得なくなってしまった。それが今の小学校英語の現状を生み出していると思います。

伊吹さんは私もよく知っている立派な政治家ですが、意外にも、そういったところが今の中途半端な状況を作ってしまった真相だったりするのです。

小学校英語の改革

—それでは、今後どのように小学校英語を改革していけば良いとお考えですか？

私の提案は、1、2年生は特別活動としてでも良いでしょう。特別活動と言っても、小学校の先生が英語をできないのでは難しいですね。そこが一番大きな問題です。

ALTと打合せするにしても、話し合う当事者が英語をできなければ日本語ができるALTしか雇えなくなってしまう。そして、ALTがせっかく来ているのに、担任の先生が授業の主導権を握っているようでは、ALTが何のために予算を使ってそこに来ているのか、分からなくなってしまう。

本来は特別活動と言っても、もう少しきちんとしたことをする必要があります。今は教科書も無い、成績もつけないのでは、非常に問題が多いと思います。

そして、3、4年生では国際理解教育の時間として日本について英語で触れてみたりする。

例えば、templeやshrineなど日本文化について学びながら触れたりすると、逆に日本語の美しさや素晴らしさが分かってきますし、日本語自体の理解が深まるはずで。

それから、5、6年生では教科とすべきです。そうでないと、教科書もなく成績もつけないわけですから、先生も中途半端になってしまいます。そういう中途半端な英語教育が始まってしまったわけですから、現場は混乱してしまっているのではないのでしょうか。

英語教育において、日本はアジアの近隣諸国と比べると、非常に遅れています。

例えば、韓国や台湾は小学校3年生から、台北市では、小学校1年生から教科となっています。中国でも英語ブームですよ。

日本は根本的に英語教育のやり方を変えなければいけません。もちろん、文法も必要ですが、文法云々は後から勉強できます。

とにかく、初めは耳から聴いて聞き取れるかどうか、そしてそれを話せるかどうか、コミュニケーションが取れる英語教育に全面的に変えていかなければいけないと思います。そして、小学校だけではなく、小・中・高・大が連携して一つのシステムのなかで英語教育を運営していくことが大事です。

小・中・高が連携した英語教育とは？

—AIU（国際教養大学）のように、授業を全て英語でという大学が増えてきていると最近ニュースでも話題になっています。今後もそういった学校が増えると考えられますが、いくら大学が変わったとは言え、今の小・中・高の英語教育ではそのような大学に入ると学生がついていけないのは目に見えています。今後、小・中・高が連携した英語教育の改革とはどのようなことが必要だと思われますか？

まずひとつは、小・中・高の先生方の意識を変えることです。いくら制度改革をしても先生方が英語教育の重要性が分かっていないといけないと思います。

英語自体は、今やアメリカの言葉でもイギリスの言葉でもなく、国際共通語となっているわけですから、そういう認識に立って、英語に対する意識を変えること。

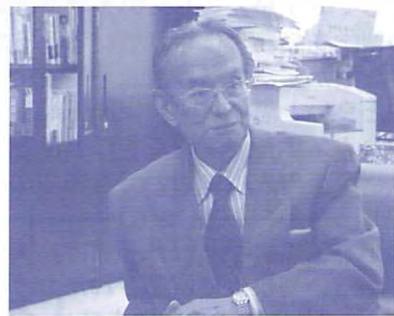
そして、やはりこれだけ英語が重要になってきている時代なのに、小学校の教員採用試験に英語が無いというのは考え物です。学校の先生になる方は、

ある程度の英語を身につけておく必要があります。

例えば、英検であればせめて準2級レベルまでは必要で、教員採用試験に英検でもTOEICでもTOEFLでもいいですが、ある程度のレベルまで課すべきだと思います。そうすることによって、初めは戸惑いもあるかもしれませんが、先生の英語への意識は随分と変わってくるのではないのでしょうか。

秋田県は実に例外で、小・中学校の学力テストも5年連続で全国トップですが、教員採用試験に英語の試験を導入してから10年ぐらい経ちます。こういった事例を元に、他の自治体ももっと積極的に英語に対する意識改革を行なっていただきたい。

それから、文科省が変わらなければいけません。文科省はまだまだドメスティックなところがあります。日本のお役所が遅れていると、何も始められませんから。



—中・高では、英語の先生がいますが、小学校の英語に関しても今と同様に今後も担任がすべきでしょうか？

いや、小学校の英語の場合は担任でないといけないことはないと思います。教員免許を取らなくても英語が達者な方はたくさんいますから、そういった方々に特別講師として手伝ってもらおうというのも一つの手立てです。

既に定年退職された方で英語ができる方にもお手伝いいただければ、日本はどんどん高齢化していますから高齢化社会の対策の一つにもなります。

そして、外国人講師についてですが、英語が国際語となった今、アメリカ人やイギリス人のようなネイティブの方でなければいけないことはないと思います。

理想的な英語教育とは？

—中嶋学長が考える、理想的な英語教育とはどのようなものですか？

小学校からではなく、幼児教育から英語を取り入れられることが理想的です。私はスズキ・メソッドの才能教育研究会の会長もしていますが、スズキ・メソッドでは楽譜を読まず、耳から聴いて覚えて暗譜し、そして何度も繰り返す。これは幼児が持つ特徴を生かしたもので、児童英語教育にも同じく言えることだと思います。

そして、スズキ・メソッドの考え方として、子どもは認知力がつく9つまでが何でも吸収して育っていくと言われてます。その時期を逃さず、早くから英語に触れさせてあげるといいでしょう。

そうすると、保護者の方ももっと英語に対する親しみが湧いてくると思います。

一つの外国語を覚えるということは、一つの文化に触れるということですから、国際理解教育という視点からも大事だと思います。

幼い頃から英語に触れ、子ども達が育ち、外国に興味を持つ学生は大学生になると3言語（母語・英語・もう一つの外国語）を使うことも可能になります。日本人ももっとマルチリンガルになると視野が広がって良いと思います。

子どもは無限の能力を持っています。育て方一つで子どもの能力はどんどん伸びます。それを伸ばしてやることができるのは、周りの大人です。

留学のすすめ

一留学に関してですが、こちらの大学では学生全員が一年間の留学を義務付けられているそうですね。

そうです。しかし、本当はもっと高校生のうちに留学されると良いと思います。家族と離れ、海外で勉強し、ホームステイ先で過ごすことはとても良い経験となり、今後の人生においても非常に役立つことがあるでしょう。

うちの大学を例に出すと、私どもは秋入学も行なっていますから、高校生で留学された方は6月頃に日本に帰国し、8月に本学の試験を受け、9月に入学することが可能です。これから秋入学を実施する大学も増えていくでしょうから、日本の外で鍛えられた子ども達が帰ってきて、大学でその能力を発揮できるよう、大学側も制度を整えていると良いですよ。

一やはり、留学する前と後では、学生さんの様子は違いますか？

非常に違います。海外の大学で単位を取って帰ってこなければいけません。英語力は更に伸びるのはもちろんのこと、相当勉強しなければ単位も取れませんから、学生はひとまわりも、ふたまわりも成長して帰ってきます。

世界で揉まれて、更に視野が広がり、グローバル人材となって帰ってくる。それがうちの就職に繋がっていると思います。大学は就職のためにあるわけではなく、勉強するためにありますから、学生たちも本当によく勉強しています。

今やおかげさまで、いろいろな企業がAIUまで来てくださって、説明会を開いたり、うちの学生を評価してくださっており、結果的に就職率はほぼ100%になっているということです。

一最近内向き思考の若者が増えており、日本は先進国の中で留学率ワースト1という現状をどう思われますか？

やはり、それは大人の責任、社会の責任だと思います。近年留学する学生が減ってしまい、今やアジアでは北朝鮮を除けば日本が一番少ない。

日本が近代化に成功したのは、明治維新の後、リーダーとなるような日本人が外国に行き、苦勞して

勉強して帰ってきました。

それを考えると、新しいグローバル社会がこれから始まろうとしているわけです。そういう時期に、できるだけ学生の時代に海外体験をすることができるよう、周りはステップバイステップで体制を整えてあげるべきです。

高校生で留学すると、大学受験にひびく…、大学生で留学すると、就職活動に影響する…というような態勢自体を今後は変える必要があると思います。



これから進む、グローバル社会

日本を全体的にみても、これからは一部の人が英語を話せたらいいという時代ではないと思います。少なくともある程度のコミュニケーションを取れるぐらいにはしておくことが望ましいですね。

グローバル化というのは、まだ本格的に始まって20年ほどしか経っていません。ソ連が崩壊し、東西冷戦が無くなり、ちょうどその頃からIT革命が始まっていくわけです。それによって世界が立体的に一つになってきましたし、インターネットで昼夜を問わず世界と結びついている時代になりました。そういう新しい時代になっていることを踏まえて日本の英語教育を見た時、日本は実にグローバル化と反対の方向を向いてしまっているのがお分かりかと思います。

これから日本もグローバル化に対応できるよう、何とか国際教養大学をモデルとして改革を進めてほしいと思っています。

児童英語教室で補える英語教育

一今すぐに小学校英語を変えとなると、難しいところがあると思いますが、全国にある児童英語教室では幼児からの英語教育において補えることが多いかと思えます。そのような英語教室でどのように補っていけば良いと思われますか？

やはり、耳から聞いて覚える、早いうちから英語をすること、子ども達が英語を聞かせること、発話させ、そして将来、グローバル化に対応できる子ども達を創りだして欲しいと思います。

インタビューを終えて…

国際教養大学では、日本人の学生と留学生が共に学び、クラブ活動も一緒に行なっている。日々国際理解や文化交流が生活の一部となり、キャンパス内での公用語は英語という環境だ。そんな恵まれた環境は、日本のどこを探してもこの大学しかない。

日本人は英語を話すことに臆病だとか、人前で間違えることを恐れ、あまり話さないなどと言われるが、この大学ではとにかく話し出さなければ何も始まらない。まさに、日本で海外留学を体験することができる場所。そして、そこで鍛えられた学生は世界という大きな舞台上で活躍し、将来的に日本に貢献することにも繋がる。

“可愛い子には旅をさせよ”とは、上手く言ったもので、小さな頃から色々な経験をさせることで、子どもたちが持つ可能性や能力を伸ばすことができる。それを海外留学で開花させる子どもも少なくは無いだろう。

周りの大人はただただ、子どもたちの行く末を心配するが故に、子どもたちが巣立っていくことを恐れているように見えるが、果たして、それは

本当に子どもたちのためになるのか？それでは何も始まらない。

大きな視野を持つ子どもたちを育てるために、まずは、周りの大人や社会が現状を見直し、そして、新たな視点を養い、大きな視野を持って動く必要がある。

過去、先人達が切り開いてくれた道を今後も切り開くには、若者をタフに育てる環境が必要だ。

現状を維持するのか、もしくは、これからの新しい道を創るのか、今私たちの手にかかっているのかもしれない。



寺井里美

JAPEC 事務局長を務める。大阪市立東高等学校英語科、同志社女子短期大学部英米語科卒。ニュージーランドやオーストラリア留学を経て、大学卒業後は英語と関係の無い職業に就くが、児童英語に興味を持ち、修行のために再度オーストラリアへ。日本に帰国後、JAPECとの運命的な出会いを果たし、今日に至る。

国際教養大学の学生たちの様子を見ていて、自分のアメリカでの大学時代を思い出した。まさに勉強漬けの日々。しかも田舎での生活というところまでそっくりだ。

英語を身につけるという面から見ると、国際教養大学はとても理に適っている。英語で学ぶためには、その基礎が必要だ。論文の書き方、議論の仕方、プレゼンの仕方は、アメリカの大学では知らないやっつけていけないため必須項目だ。さらに、学生達は自身の英語のレベルを上げて行かないと次の段階に進むことができないようになっていく。一般教養科目を取るにも、留学するにも基準のTOEFLスコアをクリアしないと行けない。厳しいようだが、そういったシステムを設けることは、必要なことだ。英語力を身につけないまま留学す

れば、苦勞するのは結局本人ということになる。そのため、むしろ親切だと思うのは私が苦勞したからだ。

実際の授業では、ディスカッションやプレゼンテーションが多いそうだ。英語でプレゼンテーションを行うための準備の多さを知っているだけにハードそうだなあ、としみじみ。心の中で学生たちにエールを送った。



佐竹佳子

京都生まれ。高校卒業後アメリカへ。ミネソタ州立大学マンケイト校 Theatre Arts学部卒。卒業後帰国し、東京にて英文事務、児童英語教師、翻訳などの職を経験。現在JAPEC入社1年目。

●中嶋学長著書のご紹介●

『世界に通用する子供の育て方』 フォレスト出版



わが子を真の国際人と考える親は多いのではないだろうか？

国際社会で通用する人間となるために必要なものは、語学力だけでなく、豊かな教養と異文化を理解することだと著者は言う。そのために家庭でできることはなんだろうか？

幼児期に豊かな心を育てる「情操(感性)教育」の重要性、グローバル化時代に子どもを育てる上で必要な考え方などを知ることができる。それ以外にも子どものための必読書まで紹介されており、興味深い。

『なぜ、国際教養大学で人材は育つのか』 祥伝社



就職“超”氷河期の時代にもかかわらず就職率ほぼ100%の大学、それが国際教養大学だ。大手企業の採用担当者は、「国際教養大学には、有名大学をしのぐ人材がたくさんいる。学生は自分の頭で考えて、それを適切に表現できる力が鍛えられている。ここでは企業にとって理想の人材が育つ」と語る。一体、どのような人材育成をしているのだろうか？

この大学に興味がある人だけでなく、これから海外の大学へ進学する人たちにも読んで欲しい。きっと役に立つはずだ。

INTER インタージャペック JAPEC



発行人:寺地 俊二 編集人:IJ編集室

CONTENTS

特別インタビュー 国際教養大学 学長 中嶋 頌雄先生	2
第36回JAPEC児童英検 実施中	6
第36回JAPEC児童英検 公開テストのお知らせ	7
この人に聞きたい 川本 佐奈恵先生	8
コラム "Looking Back, Looking Forward" Christopher Wretmanさん	11
がめら先生のこども英語教育道場 池亀 葉子先生	12
コラム「世界を一蹴」 谷村 英高さん	13
「よく知ろう！明日からできる特別支援」 村上 加代子先生	11
JAPECこども英語フェスタ 2012 報告	14
脳に効く英語のシャワー	16
「よく知ろう！明日からできる特別支援」 村上 加代子先生	18
タスマニア島ってどんなところ？ 大塚 真弓さん	19
daCiの活動に参加しませんか？ 三上 久美子先生	20
JAPEC国際交流サマーキャンプ 2013	21
JCNスクエア	22
ワークショップ・イベント情報	22
<広告>ワールドファミリークラブ	23
どきどきチェック	24

あけましておめでとうございます

JAPECは今年で35周年。これまでJAPECにご協力いただいた全ての方々にお礼申し上げます。これからも会員教室の皆さんをはじめ、児童英語に携わる人達と協力しながら、児童英語の更なる発展に貢献したいと願っております。今年も、児童英検、ハワイキャンプ、タスマニアツアー、夏のキャンプなどを通して世界へ羽ばたく子ども達を応援します。

